

<サムルノリ>の生みの親－沈雨晟さんと神戸

飛田雄一

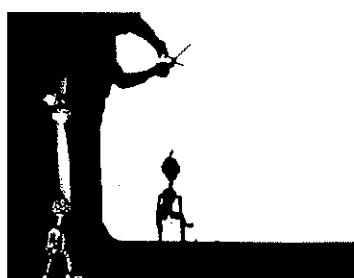


3月20日、韓国サムルノリのリーダー・金徳洙の公演がクレオ大阪北であった。岩波書店から発売された自伝『世界を打ち鳴らせ－サムルノリの半世紀』(清水由希子訳、2009.2)の出版記念を兼ねた公演であった。なかなかスゴイ舞台だった。

さっそくその本を購入し、サインもしてもらった。そこに次のような記事がある。

「(1968年)2月の公演に向けて幾度も会議を重ねた。プログラムを構成する曲目が、いちばんの悩みどころだった。そのとき、民俗学者のシム・ウソン(沈雨晟)先生が斬新なアイデアを打ち出した。／『四つの打楽器を使って、座ったまま演奏するプログラムをつくってみてはどうかね?』／ケンガリ。チン、チャンゴ、ブクが専門の私としては、願ってもない話だった。シム・ウソン先生は四つ(サムル)の楽器による演奏(ノリ)という意味で<サムルノリ>という名称まで考えてくれた。最高のアイデアだった。<男寺党>が<サムルノリ>の名で生まれ変わった瞬間だった」(185~186頁)

その沈雨晟さんと神戸は縁が深い。いろいろ思い出してみたいと思う。



まずはなにわともあれ『むくげ通信』をひもとくと69号(1981.11)に八巻貞枝「ソウルアンサンブルを見て」がある。それは沈雨晟さんが代表をつとめるグループで、その名

は「ソウルオウリム城皇堂」を縮めたものだ。1981年11月10日、神戸学生青年センターで公演が開かれている。出し物は「洪洞知の外出」と「農舞」だ。当時、私が撮影した芸術写真?が自宅のギャラリー?を飾っている。

沈さんは著名な民俗学者で、男寺党をはじめ消えかけていた朝鮮の民俗芸能を発掘・記録されたことで知られているが、ご自身が人形劇の演者でもある。KBSアナウンサーという経験をもっておられ、声もすてきだ。私も最初のころ韓国語の発音をよく直された。その後、訂正がなくなったのは先生がもうそれを諦めたのだと推測している。

ソウルアンサンブルがどういうルートで神戸に来られるようになったのか、思い出せない。当時、聖和社會館館長の金徳煥さんの紹介ではないかと、現在ソウルにおられる金さんに電話した。聖和社會館の新装オープン行事にソウルアンサンブルが神戸公演のあと出演しているからである。すると、飛田の紹介によるという。ますます分からなくなつたが、後に沈さんの日本語の本『民族文化と民衆』(行路社、1995)を編集した梁民基さんの紹介であったのかも知れない。梁さんはそれ以前にむくげの会や学生センター朝鮮史セミナーなどで何回か来ていただいている。

1983年には関連行事が2度、学生センターで開かれている。2月19日の「沈雨晟人形劇場－双頭児」と「金明洙・金一玉韓国伝統舞踊」だった。このことは鹿嶋節子が『通信』78号(1983.5)に「隨想・二つの公演を見て」を書いている。人形劇場は、神戸、大阪、京都、伝統舞踊は、神戸、広島、大阪、名古屋で公演が開かれた。金明洙さんは、ソウルアンサンブルのメンバーとしても来られた女性で、のちに北朝鮮を無許可で訪問した黄哲

暎と結婚して一時期韓国にもどれずドイツで生活されていたこともある方だ。

人形劇場は、いろんな人形が登場し、朝鮮戦争や光州事件をイメージさせるもので、「ひとつの民族が分断されている現実。それらが、微妙に、また大胆に、時にはコミカルな動きで表現される。1時間余りの公演の中に、私たちは韓国の、韓国人のいろんな姿を見る」(前掲、鹿嶋)とある。学生センターでの公演では、沈さんの指導のもと私は照明係を仰せつかって、奮闘したのである。

私は伝統舞踊のふたりを空港まで迎えるにいったが、トラブルがあった。当時、若い女性の来日はビザの取得が難しかったが、それは事前にクリアーした。が、空港で、ふたりがなかなか出てこないのである。そのうち「飛田さん、事務所までお越しください」というアナウンスが流れた。何事かと事務所にいくとふたりが心配そうに並んでいる。入管が衣装、太鼓などを持ち込んだふたりを不法就労するのではないかと疑つたのである。私は一生懸命に我々の趣旨を説明してなんとか入国することができた。ふたりの舞踊は、ショ一化された舞踊に慣れていた私たちにとってとても新鮮なものであった。

そして同年9月29日にも朝鮮史セミナー「韓国の伝統芸能」の初回に「コクトゥガクシノルム」をテーマに講演してくださっている。

1985年8月16日には、ソナンダン(代表・沈雨晟)が同じく学生センターで公演している。創作人形劇を中心としたプログラムで、そのとき歌われた「ウリサンウリカン」について公演のこともあわせて佐々木道雄が『通信』92号(1985.9)に書いている。「北へ行けば白頭山、南に行けば漢拏山」「北に行けば豆満江、南に行けば洛東江」の歌詞に、私の目もウルル～となったことを覚えている。

また同年9月7日に神戸市立博物館にお願いしてムーダンの公演を行なった。沈さんの紹介によるもので、沈さんも来日されムーダン会場の飾り付けをされた。大阪公演は、確か生野区民ホールで開かれた。公演の最後に、

ムーダンが集めたお金を障害者に渡したとき、日本では、それが施しをする悪いイメージと重なって障害者が受け取るのを拒否してちょっとした騒動になった。当時韓国では障害者が街頭で、時には地下鉄車内でも施しを求めることがあった韓国社会とのギャップを感じさせるものであった。

またこのころだったか記憶が定かではないが、沈さんが韓国の伝統仮面劇のグループの東京公演を企画したが、私は東京までお手伝いでかけたことがある。完全に沈雨晟さんのおっかけをしていたようだ。

1994年は東学農民戦争100周年だったが、11月にソナンダンの「音楽舞劇・セヤセヤ(鳥よ、鳥よ)」の京都、大阪、神戸公演が行なわれている。

そのときに冊子が残っている。けっこう気合の入った冊子で、金徳煥・梁民基・飛田雄一編集、製作は、ウリ文化研究所、ハンマダン、聖和社會館、長田マダン、神戸学生青年センターである。金時鐘さんも文章を寄せてくださっている。

(残部が残っていました。希望者には無料、送料むくげの会負担で差し上げます。ふとっぱら～～)



学生センターは1996年から韓国祭ツアーをスタートさせたが、その2回目は1997年10月、公州百濟文化に行った。公州にできたばかりの沈雨晟さんの民俗劇博物館をさっそく訪問した。その後、祭ツアーは安東仮面劇文化祭にもでかけている。沈さんの影響、大なるものがある。沈さんはショ一化された安東の祭には余り賛成ではなかったようであるが、私は、他の参加者が仮面劇は、2、3本みたらいいじゃないの、というのを尻目に、安東、河回で仮面劇を満喫したのだった。

そして、今年6月10日、東京のパーク人形劇場03-3379-0234に招かれて「沈雨晟一人芝居・アリランアリランアラリヨー4・3の峠を越えていく」が上演される。そしてまた私は東京においかけていくのである。